

道光十八年「御手形写」所収の江戸上り関係史料をめぐって

著者	得能 壽美, ティネッロ マルコ
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	沖縄文化研究
巻	36
ページ	171-222
発行年	2010-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/6431

道光一八年「御手形写」所収の江戸上り関係史料をめぐって

得能壽美
ティネツロ・マルコ

① 史料について

ここで扱う史料は、道光一八年（一八三八）に首里王府から八重山島へ達せられた文書を筆写・集成したもので、かつて「往復文書」と称された文書集のひとつである。ハワイ大学が調査・撮影したマイクロによるもので、表紙に表題などはみえないが、付箋紙に「64道光十八戌年御手形写」とあり、漢字の上にローマ字で読みを付してある。

この史料は八重山の喜舎場永珣家文書であることから、マイクロ製本版は、法政大学沖縄文化研究所では『八重山文書（喜舎場コレクション 22）』としている。この版では、本史料は表紙を含めて

一六五枚（丁）ほどで（重複が数箇所ある）、③で述べるように文書の数え方に課題が残るが、最も多くみれば一四九点の文書を収めることになる。ここでは文書番号を「」で示し、末尾の参考史料に掲載したものには※を付した。

ところで、八重山関係の往復文書集は、ほかにもいくつか確認されており、乾隆三六年（一七七二）明和津波以前のものは「参遣状」、以後は「御手形写」と称されている。さらにのちに「御問合控」という名称もある。

「参遣状」「御手形写」は、同じ喜舎場永珣家文書や豊川家文書などで確認されており、たとえば豊川家文書「参遣状拔書」は康熙二五年（一六八六）から乾隆三〇年（一七六五）まで、同家「御手形写拔書」は乾隆三六年から道光一〇年（一八三〇）までの文書が所収されている。それらと比較して、本史料は道光一八年の正月から閏四月までの文書しか収められていない。このような短期間の文書集が編集された理由は未詳だが、本史料所収文書のほとんどが、尚育への冠船と江戸上りに関するものである。最初の頁から文書の前半が欠けており、最後の頁の文書も後欠で、その最初と最後の文書が冠船・江戸上りに関係しないというのも、指摘しておかなければならない。

道光一八年に「来子年江戸^江御使者被差上候」があるので、御用布・御用物を八重山に注文を始めるという文書【※3】が、全体でも三番目に掲載されていること。さらに、江戸上りが延期になって「江戸^江御献上馬」も延期になったという文書【147】が、全体では最後から三番目に掲載されている。こ

の点からみても、本史料は、道光一八年における冠船・江戸上りに関連した文書の集成を意識したものとして、現状からは誤りはない。

本史料の特質のひとつである道光一八年の冠船については、本史料にも興味深い内容のものがあるが、尚家文書に多くの記録があり（豊見山二〇〇八 五一五～五一七頁）、さらに道光一八年の「渡名喜島冠船日記」も紹介されており（漢那・田口二〇〇八）、あわせて今後の研究をまちたい。また、本史料には冠船・江戸上りの準備期間であっても、通常の上納などに関する史料、技術・学問に関する史料などもあるが、ここでは江戸上りに限定して紹介を試みる。

江戸上りに限定して紹介する理由は、共同で研究にあたったティネツロ・マルコ氏が江戸上り研究に業績があり、得能の関心となる八重山への物品の注文が江戸上りに関してまとまっていることによる。なお、それぞれの関心領域が明確なため共同執筆ではなく分担執筆としたので（ティネツロ・マルコ氏②担当、得能①③担当）、それぞれに責任があるのはもちろんだが、道光一八年「御手形写」の翻刻は得能に責任がある。

【註】

（一） 新城敏男氏は、道光一八年「御手形写」に九件の技術・学問に関する情報があることを紹介されている（近世期八重山における技術・学問について―家譜などを中心に―『石垣市史のひろば』第4号 石垣市総務

部市史編集室 一九八三年 一二頁。

(得能壽美)

② 道光一八戊年「御手形写」から天保一三年の琉球使節の慶賀使準備をみる

はじめに

天保一三（一八四二）年の琉球使節については、現存している史料が非常に少ないので、ほとんど研究されていない。¹ 本稿では、道光一八戊年「御手形写」という史料を紹介するため、同史料中の天保一三年に琉球使節が派遣される前に首里王府から八重山在番役人へ出された指示に注目した。首里王府は、琉球使節派遣を理由に八重山に様々な命令を下した。その内容を考察することにより、琉球使節の準備について新しい指摘ができると思われる。琉球使節は徳川幕府と通信国との儀礼、いわゆる国際的な儀礼であると同時に琉球国内的な儀礼でもあり、周辺の諸島々にも負担を伴った重要な行事であった。また、天保一一年の慶賀使の延期の理由を述べながら、天保一一・一三年の副使任命の経緯を明らかにしたい。

一 徳川家慶のための慶賀使の準備

天保八（一八三七）年四月、第一一代將軍徳川家斉は次男、徳川家慶に將軍職を譲った。その後、従来どおり新しい徳川將軍のために琉球使節の派遣が計画されたと思われる。家慶のための慶賀使の準備について次の史料をみよう【3】。

来子年江戸^江御使者被差上候□御用布・御用物并御使者役々御免□（銀）詔反布・諸品等、先例を以手当仕置候様二^与之儀^者去年申越置通二^而、此節別紙注文并御使者役々御免銀注文差越候間、随分入念位宜敷相調、当夏より来夏便迄二皆同積登候様可被取計候、是迄冠船二付^而者大粧之御用物相調候上、又候江戸立御用物調方別^而可及難儀候得共、御先規難差欠御用品候「」を以、屹^与引励随分注文通位宜敷相調御要用全相弁候様、精々可被致下知候、此段申越候、以上但、江戸蔵役・書役^者来春上国仕候付、右面々注文品^者当夏便二積登候様無之候^而者間二不合候間、其心得可有之候

戊二月十一日

識名親雲上

八重山島／在番

小禄親方

この史料の日付は天保九（一八三八）年二月一日であり、首里王府から八重山在番役人（王府の

役人）への通達である。内容によると、来る子年、つまり天保一一（一八四〇）年に琉球使節の江戸参府にあたつて、去年より使節のための用布と用物、すなわち王府が用意する諸品（③での分類A史料）、また使者御免銀で購入する反布・諸品、すなわち使者たちが個人的に注文する諸品（同B史料）などの準備について通達があつた。今回別紙で注文し、使者の御免銀で諸品を頼んだので、入念に準備を調べ、今年の夏から来年の夏までにすべての注文品を首里王府に送ることを命じている。近年には清朝の冠船の歓迎（一八三八年、いわゆる「戌の御冠船」）のために様々な品を調べ、また江戸参府のための用物を求めるのは大変な負担であるが、先例のとおり必ず命令に従つて注文品を調達して首里王府に送ること。しかし、歳役と書役は来年の夏に琉球館で勤務するために上国するので、彼等が注文した諸品が今年の夏まで到着しないと間に合わないといつてゐる。

これからみると、天保一三年の慶賀使は、最初に天保一一年に予定されたことがわかる。史料中で去年というのは天保八（一八三七）年のことであり、すなわち家慶が將軍に襲職して（四月）まもなく新しい將軍のための慶賀使が計画され、その後すぐ使節に関わる諸準備が始まつたと思われる。この史料からみると、首里王府は自らの力だけではできず、先例どおり江戸参府の使節の準備にあたつて八重山に様々な要求をすることがわかる。冠船の歓迎に対しても同様であつた。

次の史料【86】は、慶賀使のために使者が八重山側に注文した諸品物（B史料）に関わる記録である。

調文

拾八舛紺嶋細上布壹反、長八尋、はゝ壹尺三寸

但、御蔵模様式番図之通

右、上国二付入用御座候間、八重山島^江御詔所望可被下候、以上、

戌二月

浦添王子使賛／内間里之子親雲上

この史料も首里王府から八重山在番役人への文書であり、その日付は天保九（一八三八）年二月である。内容は上質の布を注文する記録であり、寸法と模様について詳しく説明がある。一番注目したのは、注文した方のことである。浦添王子は天保一三年の慶賀使の正使であつたので、同じく天保一一年のときから正使に選ばれたと思われる。使賛とは正使の供であり、内間里之子親雲上は天保一三年に正使の使讃として江戸まで上つたので、浦添王子のように使節が予定された最初から選ばれたと思われる。興味深いのは、使者（右の史料では使讃）が、個人的に琉球使節（この場合、上国は江戸参府を意味する）を理由に必要な品物を注文したということである。次の史料【96】をみよう。

調文

一、式拾舛紺嶋細上布式反、長八尋、はゝ壹尺三寸ツ、

但、御蔵模様式番・四番図之通

一、海鼠拾五粒

右、来子年上国仕候付入用御座候間、八重山島^江御詠所望可被下候、以上

戌正月

楽師／牧志里之子親雲上

この史料からも、琉球使節に選ばれた使者は個人的に必要なものを要求していることがわかる。この場合は座楽³に演奏する楽師牧志里之子親雲上による注文の記録である。使者の注文に關してもう一つの例を挙げる。次は儀衛正に關する記録である（104）。

調文

一、貳拾舛紺嶋細上布老反、長八尋、幅老尺三寸五分

一、拾八舛紺嶋細上布老反、長八尋、幅老尺三寸五分

但、貳行御藏図小模様見合

一、海鼠三拾ヲ

右、来子年江戸立二付儀衛政（ママ）「仕候付入用御座候間、八重山」所望可被下候、以上

戌正月

儀衛正／伊計親雲上

この史料も前の史料と同じ内容であり、ここでは儀衛正として任命された伊計親雲上が江戸参府のために必要な品物を頼んだのである。以上のすべての史料からみると（③表B参照）、使節に選ばれた使者は自らの役割のために諸品を注文した。日付からみると、使者たちは、それぞれ異なる日に注

文しているので、直接に八重山の在番役人に書簡などを出すことなく、③に指摘があるように、首里王府に必要な品物のリストを提出し、その後王府が八重山側に調達の書簡を送るのである。

以上引用した史料を通じて、首里王府にとつてだけではなく、八重山にとつても江戸参府の琉球使節や清朝の冠船に、大きな負担を伴ったことがわかる。当然であるが、王府が支配していた周辺の諸島々にも同じく負担させたと思われる(③参照)。琉球使節の江戸参府は、琉球が自らのアイデンティティを維持するために不可欠な儀礼であるので、使者の用物、進物などの準備にあたつて、王府をはじめ諸島々にいたるまで負担が及んだ国内的な行事でもあつた。

そして、琉球使節の準備に関して、使者は選ばれてから個人的に王府に対して様々で詳細な注文をしたことについても指摘できる。だが、江戸参府にでかけるすべての使者ではなく、正使以下楽正までの使者のみこのような要求ができたと思われる。今回紹介した史料、道光一八戊年「御手形写」には、使者の諸注文についていろいろな記録があるので、今後全体の史料を使用した上で、この課題に対するさらに進んだ研究がなされることを期待する。

二 天保十一年の慶賀使の延期と副使任命の経緯

前述したように、天保十三年の琉球使節は、最初に天保十一年に予定された。池宮正治氏はこの延期について「もう一つ大きな問題は、第一二代將軍家慶が一八三七に襲封し、その慶賀使派遣につい

てである。この頃ちようど冊封使を迎えていたので、時期を若干おくらせていたのである」と述べている。¹⁴¹すなわち、首里王府が翌道光一八（一八三八）年に冊封使を迎えたので、琉球使節の江戸参府が遅れたといわれている。この慶賀使の延期の理由は、八重山の史料〔142〕にみられる。

来子年江戸立之筈^二而御用之反布・諸品并御使者役々御免銀注文□□諸品等当夏方来夏便迄二皆同積登候様申越置候処、江戸西御丸炎上二付、江戸立被召延、御普請成就之上年限□被仰渡段此節御国元より申来候、右二付^{而者}都^而之反布・諸品調方差扣、年限相知申越候節調達差登候様可被申渡候、此段申越候、以上

戊閏四月

小禄親方

八重山島／在番

この史料の日付は天保九（一八三八）年閏四月であり、首里王府から八重山在番役人に出された文書である。内容によると、天保一年の慶賀使にあたつて様々な準備が進み、御用の反布・諸品と御使者役々御免銀注文の諸品などを、今年の夏から来年の夏までの間に調達し、王府に送ることが八重山側に命じられていた。しかし、「江戸西御丸炎上」を理由に慶賀使が延期されたことを伝えている。江戸城西の丸の普請が成就するまでには時間がかかり、完成してから改めて幕府は使節に関する指示を出す、という情報が薩摩藩から王府に伝えられた。そして、そのときまで、従来まで頼んだ諸品を送らないように命令した。

後で述べるように、小禄親方というのは、この段階では慶賀使の副使であつた。すなわち、副使というのは、使者一行の中で正使の次の地位にある使者で、東アジアの儀礼を熟知した使者の責任者であつただけではなく、琉球使節全体の準備に責任を持ち、延期などの急の情報を地方に伝える役割も持っていたことがわかる。

『徳川実紀』では江戸城の炎上について「十日卯上刻ばかり西城台所より火出で、書院番所のみ残り。余はことごとく炎上して」と記録している。また、『斉興公史料』では、「天保九戊年三月十日西丸炎上、御台所ヨリ出火奥向不残焼亡ス」と記されている。江戸城西の丸は天保九（一八三八）年三月一〇日の午前五時ごろに炎上した。両方の史料から西の丸が非常に大きい被害を受けたことがわかる。西の丸は、將軍職から隠退した大御所（家斉）または將軍世嗣（家慶）の住む場所であつた。まもなく老中水野忠邦が西丸造営掛として再建の準備に入り、大棟梁を決め、工事職人の指名も定めた。造営費については、諸大名から上納金が寄せられることになった。翌天保一〇（一八三九）年の再建まで、著しい経費がかつたのである。

『通航一覧続輯』によれば、天保三（一八三二）年の謝恩使のお目見えの儀（將軍への最初の挨拶）について、「琉球人、御本丸相済西丸江登城」と記録されている。同じ天保三年のお目見えに関して、『儀衛正日記』では「御本丸西御丸御次第書之通御目見相済」と記されている。以上の史料が示すように、琉球使者は江戸城で御本丸での儀礼が終わってから、次の儀礼のために西の丸に入ること

になっているので、⁸⁾ 西の丸が炎上した理由で琉球使節が延期されることは理解できる。その後も、琉球使節は天災・火災により延期された例がある。安政二（一八五五）年一〇月二日、江戸は大地震に襲われた。この安政大地震により薩摩藩の屋敷は大被害を受け、そのため同藩は安政三年に予定された琉球使節を延期することを幕府に願ひ出た。同年一月二日に幕府は、薩摩藩の願ひどおり慶賀使の参府を延期することを命じた。⁹⁾

天保一一年の慶賀使は、江戸城西の丸の炎上によつて延期されたと思われる。しかし、このほど公開された尚家文書（那覇市歴史博物館）に、内題が「道光十七年丁酉秋より翌戊戌春迄 下御状御書付写 天保八年御書院」という史料がある。¹⁰⁾ 首里王府と薩摩藩とのいわゆる往復文書で、今回は確認することができないが、江戸城西の丸の火災や、琉球使節の延期に関するやりとりもあると思われるので、その全貌が明らかになるであろう。この課題については今後の研究に任せたい。

次に、天保一三年の慶賀使のときの副使任命の経緯に視線を向けたい。宮城栄昌氏は「その孫小禄親雲上良恭は一八〇七年（喜慶二）翌年の御冠船に備えて躍職（楽童子）に任ぜられ、一八三二年（天保三年）の江戸上りには讃議官となり、一八三七年（天保八）には一八四〇年参府予定の慶賀副使に任命された。一八四〇年の江戸上りは一八四二年（天保一三）に延期され、また良恭は一八三九年三司官に任ぜられたため、副使としての参府は実現をみなかった」と述べている。¹¹⁾ 当時の琉球使節延期の理由は前に述べたが、宮城氏によれば小禄親雲上良恭という人物は、冠船のための楽童子、江戸参

府の讃議官の役割を経て、家慶のための慶賀使のときに最初に副使として選ばれたが、使節が延期され、その後三司官に任命されたので江戸参府に加わらなかった。先行研究に従いたいが、その背景に行なわれた諸行事を明らかにする余裕があるので、これについて考察したい。次の史料をみよう。¹²⁾

同十七年丁酉年十月十七日蒙 王恩遣發江府之副使遵 太守之命雖不得充舉用功勞准同副使其言上寫記左

覚写

小禄親方

右^者来子年江戸^江御使者被差上筈^二而[、]正使以下樂正迄當夏御國元^江如先規人柄御伺申上、小禄^二者^者副使奉伺候付

太守様被達

貴聞候處、小禄親方儀実体成人柄^二而[、]至極宜者之由候付、伺通^二茂^茂可被仰付候得共、伊舍堂親方儀去辰年謝恩使之節樂正^二而[、]被召列候處、於 營中御都合向宜皮(彼)是取馴候付、別段思召之訳被為

在伊舍堂^江副使被仰付候、左候^而小禄儀副使不被仰付候得共、兼^而御用立勤功有之者之由候間、副使同様勤功取訳有之候様 思召候付、得其意可致取扱旨島津但馬殿^里被仰渡候御書付取添琉球館聞役、在番親方申越趣有之候間、弥仰渡通副使之勤功御取持被 仰付被下度奉存候事

以上

西十月十七日

この史料は「馬姓家譜（小禄家）」の記録であり、日付は道光一七（天保八、一八三七）年酉一〇月一七日である。「正使以下樂正迄當夏御國元^江如先規人柄御伺申上」というのは、江戸参府の使者のなか、正使から樂正までの任命については、先例どおり、すなわち従来までのように琉球使節が派遣する二、三年前に、薩摩藩に選ばれた使者のリストを送ることになっていた。内容からみると、首里王府は天保一一年の慶賀使にあたつて、小禄親方を副使として薩摩藩にお伺いを立てたが、島津斉興はそれに関して、小禄親方は副使として選ばれるのは適切な人柄ではあるが、伊舎堂親方は天保三（一八三二）年の謝恩使の際、樂正として江戸まで上つて、経験があるので副使として任命するにはもつとも相応しい、と述べた。つまり、王府の要求に応じず、斉興の意志に従つて副使が選ばれた。これは琉球使者の任命に関して、薩摩藩主の意志が著しく反映されていたことを示す。¹³⁾

しかし、天保一三年に副使として江戸まで上つたのは、座喜味親方という人物であつた。当時の副使任命を明らかにするように、伊舎堂親方、小禄親方、座喜味親方のそれぞれの家譜を検討しながら説明したい。

島津斉興が勧めた伊舎堂親方は、「道光八年戊子十月七日為謝 王世子尚育公承祧續統事尚氏豊見城王子朝春赴于江府之時奉 命為樂正」という経験をし、そして「本年十月十七日為慶賀事奉 命為

副使同年至十二月病卒故不赴江府」こととなった。¹⁴ 本年は道光一七〇〇天保八（一八三七）年のことであり、一〇月一七日に副使として任命されたが、一二月（八日）に病死したため江戸参府することができなかった。

小禄親方の「馬姓家譜」では、天保三年の謝恩使について右のように述べている。¹⁵

：且正使豊見城王子於御國元被致病死、讃議官普天間親雲上^江正使勤被仰付候付普天間^江豊見城養子被仰付、平良按司^者普天間嫡子被仰付候様 御沙汰被為在候段被仰渡、其通二^而段々御差支相成事二^而家督之儀順々嫡子^江相續被仰付、普天間身分格式等之儀^者御當地先規之通被仰付候様可奉願旨小禄^江申含越趣有之：

すなわち、正使豊見城王子が鹿児島で亡くなり、その代わりに正使として讃議官普天間親雲上が任命され、改めて讃議官として小禄親方が選ばれた。伊舎堂親方が亡くなってまもなくの天保八年、小禄親方の家譜には次のように記されている。¹⁶

道光十七年丁酉年十二月二十日因 公方様御代替來子年赴江府為副使（是時副使翁氏伊舎堂親方盛方病卒故為此使後因任法司官交代其使）

この史料が示すように、小禄親方は道光一七〇〇天保八年一二月二〇日に来る子（天保一一、一八四〇）年の慶賀使副使に任命された。すなわち、薩摩藩主が勧めた人物が亡くなってから、王府が任命した方が副使として選ばれたのである。その後、前述したように、天保九年三月一〇日に江戸城西の

丸が炎上したので慶賀使が延期された。その間、小祿親方は「道光十九年己亥十一月十五奉 命任法司官」⁽¹⁷⁾、すなわち三司官に任命されたので、天保一三年の琉球使節に参加しなかった。次の史料をみよう。⁽¹⁸⁾

同十九年己亥二月朔日為年頭慶賀之事奉 命為使者（略）

道光二十年庚子九月十日在覽府之時因 公方様續統為慶賀之事奉 命為副使（正使尚氏浦添王子朝意）

この史料は「毛姓家譜（座喜味家）」の記録であり、同一九年は道光一九年で、すなわち天保一〇（一八三九）年のことである。内容から二月一日に座喜味親方は年頭使として任命され、翌天保一一（一八四〇）年九月一〇日に薩摩藩在勤中に天保一三年の慶賀使にあたつて副使として選ばれた。これで天保一一・一三年の副使任命の経緯が明らかになった。また、天保九年三月一〇日以降に延期された琉球使節は、天保一一年九月一〇日に副使が任命されたことから判断すると、その以前に慶賀使の再派遣が計画されたと思われる。

「中山世譜附卷」の道光二〇年条が、「遣毛氏座喜味親方盛普。慶賀年頭。兼賀太守様。因江府造作西丸殿時。奉献黄金。蒙賜剣刀・時服。又因回祿作災。延焼高輪御屋敷。西門長屋廻等処。奉問安否」と述べているように（『琉球史料叢書五』一〇二〜一〇三頁）、同じ時期に薩摩藩主は西之丸の再建のために幕府に黄金を献上し、また島津の高輪屋敷の西門長屋の周辺も類焼したことからみると、当時

の薩摩藩の出費は多かったことがわかる。これも慶賀使の再派遣に影響を与えたと思われる。

最後に、琉球使節の延期にあたって使者の変更について考えたい。前述したように、天保一三年のとき、特別な事情によって副使の人事が異常な状態になり、次々に三人が任命されることに至った。しかし、他の使者は、延期になってから実際の江戸参府に出かけたのか。基本的に一番地位の高い使者は変更することなく江戸まで行くが、それぞれの特別な事情によって変更する使者もあると思われる。例えば、天保一一年に任命された大部分の楽童子は変更された。楽童子は一五〜一八歳位の男子であるので、延期になってから二・三年が経つと歳をとって琉球使節メンバーとして不適当となる。⁽²⁰⁾一方で、楽師たちはほとんど変わっていない。また、正使や副使が代わると、それぞれの使讃も変わると思われる。今回の史料にでてきた正使浦添王子の使讃内間之子親雲上は、正使のように延期になって再計画のときにも使讃として任命された。ただ、正使の従者の半分は代わった。副使小禄親方の使讃は最初に本部里之子親雲上が選ばれたが、実際に江戸参府まででかけたのは祝嶺親雲上と譜久村親雲上であった。この三人の家譜は確認できず、いつ任命されたか、彼等の任命が副使任命とのかわりがあるかどうか確認できなかった。琉球使者の任命にあたっては薩摩藩主の意志が反映されている。そして、使節が延期になったら、使者の特別な理由によってメンバーが変更される場合がある。今回具体的に確認できなかったが、これも今度のとても重要な課題となると思われる。

おわりに

本稿では史料紹介を目的として天保一三年の琉球使節の慶賀使に関する準備を考察した。

八重山の史料を使用することによって琉球使節、または冠船に関わる儀礼は徳川幕府や清朝と首里王府、いわゆる支配者と朝貢国との儀礼だけではなく、琉球王国内でも首里王府と周辺の諸島々、すなわち小さいレベルでの君主と臣下との関わる儀礼でもあったことが明らかになると思われる。また、天保一一年の慶賀使の延期の理由と副使の任命経緯についても指摘した。

【註】

- (一) 琉球使節に関しては、宮城栄昌氏は全体的に使節の構成などの詳細を明らかにした(宮城栄昌『琉球使節の江戸上り』第一書房、一九八二年)。横山学氏は、日本側の琉球認識と出版文化を検討した(横山学『琉球国使節渡来の研究』吉川弘文館、一九八七年)。紙屋敦之氏は政治・外交史の側面から琉球使節を考察した(紙屋敦之『幕藩体制下における琉球の位置―幕・藩・琉三者の権力関係―』『幕藩制国家の琉球支配』校倉書房、一九九〇年、同「琉球使節の最後に関する考察」前掲『幕藩制国家の琉球支配』所収、同「琉球使節の解体」『琉球王国評定所文書』第五卷、一九九〇年、同「琉球の慶賀使について」『歴史と地理』五三〇号、一九九九年)。梅木哲人氏は書翰問題を検討した(梅木哲人「琉球国王書翰の検討」『地方史研究』一九七号、一九八五年)。豊

見山和行氏も書翰問題について分析した（豊見山和行「江戸幕府外交と琉球」『沖縄文化』六五号、一九八五年）。真栄平房昭氏は琉球使節に関する「旅役」について考察した（真栄平房昭「琉球における家臣団編成と貿易構造——「旅役」知行制の分析——」『九州と藩政2』、一九八四年）。また、同氏は東照宮参詣を検討した（真栄平房昭「幕藩制国家の外交儀礼と琉球」『歴史学研究』六二〇号、一九九一年）。

(2) 琉球館は鹿児島に置かれた首里王府の代表である在番親方の居館のことである。蔵役と書役は琉球館の役職であり、蔵役は江戸まで琉球使節に同行することになっていた。

(3) 江戸上りの中には、二種類の音楽があつた。路次楽と座楽である。座楽は管弦楽を用いた音楽を演奏した。座楽は、楽正により指導され、楽師と楽童子から構成された。普通、楽師は五人であり、楽童子は六人であつたが、宝永七（一七一〇）・正徳四（一七一四）年度に限り、両音楽家は八人であつた。路次楽は、儀衛正により指導され、一五・二〇人の音楽家で構成された。

(4) 池宮正治『近世沖縄の肖像 下』（南西印刷〈おきなわ文庫〉、一九八二年）一二二頁。

(5) 『徳川実紀』第二編（吉川弘文館、一九七六年）、三五一頁。

(6) 『鹿児島県史料 島津斉宣斉興公史料』（鹿児島県、一九八五年）二六三頁。

(7) 『通航一覽統輯』巻之一（清文堂出版、一九六八年）、八頁。

(8) 天保三年のお目見えのとき、本丸では琉球使者は第一代將軍徳川家斉に挨拶をし、その後、西の丸で養嗣子の家慶に挨拶を述べた。

- (9) 『江戸立二付仰渡留』（東京大学史料編纂所所蔵） 八号。
- (10) 豊見山和行（編著）『琉球国王家・尚家文書の総合的研究』（科学研究費補助金（基盤研究B）課題番号一六三二〇〇九一 琉球大学教育学部、二〇〇八年）五二四頁。
- (11) その孫というのは、小禄親雲上良恭は小禄親雲上良頼の孫であることを意味している（宮城栄昌『琉球使者の江戸上り』第一書房、一九八二年 四九～五〇頁）。
- (12) 「馬姓家譜（小禄家）」（『那覇市史 資料篇第1巻7 家譜資料三』那覇市企画部市史編集室、一九八二年）五三三頁上段。
- (13) 幕末の琉球使節の準備に関する薩摩藩の影響について、矢野美沙子「幕末期琉球における江戸上り使節派遣準備」（二〇〇八年度紙屋敦之ゼミ共同研究成果報告書『近世日本における外国使節と社会変容③——大君外交解体を追う——』紙屋敦之研究室 早稲田大学文学学術院、二〇〇九年）を参照。
- (14) 「翁姓家譜（伊舍堂家）」（『那覇市史 資料篇第1巻7 家譜資料三』（註12参照）一〇一～一〇二頁。
- (15) （註12）同「馬姓家譜（小禄家）」五三二頁下段。
- (16) 同右五三三頁上段。
- (17) 同右五三三頁下段。
- (18) 「毛姓家譜（座喜味家）」（『那覇市史 資料篇第1巻7 家譜資料三』（註12参照）七二七～七二八頁。
- (19) 年頭使とは、首里王府が薩摩藩主へ年頭慶賀のために派遣した使者を意味している。一六一三年にはじめて

派遣し、一六四二年に三司官宜野湾親方正成が年頭使として上国したときから三司官の三年詰が始まった。三年詰は一六四六年に薩摩藩に赴いた三司官国頭親方朝季の年頭使兼三年詰を最後に廃止された。その以降、年頭使が詰めることになった。一六六七年から親方クラスが勤めることとなり、在番親方の制度が出来上がった。在番親方は鹿児島に一八ヶ月詰め、次の年頭使と交代した(紙屋敦之『薩摩と琉球』私家版、二〇〇二年 三三頁)。(20) 玉井建也「琉球使節派遣準備と解体過程―「最後」の琉球使節を通じて」(『交通史研究』六七号 二〇〇八年) 五四頁。

(テイネツロ・マルコ)

③ 「江戸立御用物」の八重山への注文

ここでは、天保八年(一八三七)道光一七 徳川家慶の將軍就任にともなう慶賀使派遣(江戸上り)における、琉球国内での準備について、とくに王府・使者から八重山への物品の注文についてみることにする。

江戸上りの準備については、宮城栄昌氏の『琉球使者の江戸上り』(宮城一九八二)に、「江戸上りの準備」という節があり、「琉球側についてみれば準備は王府全体のもの、使者個人のものに分れたが、王国にとって江戸上りは御冠船につぐ外交上の重大行事であったから、準備に伴う精神的・

物質的負担は絶大なるものがあつた」という（宮城一九八二 五六頁）。具体的に宮城氏は、「修礼と音楽練習」と「服装の準備」を掲げている。

人的な準備は、道光一七年（一八三七）夏には、「正使以下楽正迄」の名が島津に対して提出された。右のことが記される同年一〇月一七日付の史料では、「来子年江戸^江御使者被差上筈」といい、道光二〇年（一八四九）の派遣が予定されていた（馬姓家譜〈小祿家〉五三三頁）。

次に、宮城氏がいう「服装の準備」を含む、物の準備については、同じ道光一七年に「来子年江戸^江御使者被差上候口御用布・御用物并御使者役々御免口（銀）詔反布・諸品等、先例を以手当仕置候様」と、王府は八重山に伝えている（※3）。翌道光一八年二月一日、王府は八重山への注文を始めることをいい、今年の夏から来年の夏までに王府に納めるようにいつている（※3）¹。

ここでは、宮城氏の分類に準じて、物資調達の主體を、A「御用布・御用物」（王府全体）と、B「御使者役々御免口（銀）詔反布・諸品等」（使者個人のもの）に分けて検討する。

そのA Bの関係を示す例がある。冠船・江戸上りに際して、王府では多くの「牛節・牛筋」を用い、牛の消費が多くなった。それらは八重山から調達しているのだが、Bの「諸御使者并王子衆・御役目御方御免銀詔」を、このたびは禁止するといっている（5）²。おそらく、Aとしての使用を優先したものとみられる。

Aについては、「江戸御献上馬」の例があり、「御別当真喜屋親雲上」が「地下中」（沖縄本島中）

を探しても良い馬がないので、宮古・八重山にも足を延ばしているように、Aとして必要であれば琉球全域から集めている（〔8・18〕³⁾。

また、江戸上りでは「木棉花之御用」があるといい、八重山の木綿が不作で「冠船御用之木棉布」が不足しているという事態を危惧した王府は、八重山に対して「去々年繰棉拾本御物買入を以差下置候」というものを、「現色」（現物）で返上するよう求めている（〔15〕⁴⁾）。いずれにしても、Aの物資調達に懸命になっている。

さて、そのAについて、すでに道光一八年一月一日に「御献上・御進上・御進覧御用并万仕立物用」のリストである「注文」が、御物奉行から八重山島在番に出されている（〔※45〕〓表A―1）。また二月には、「御進物御用」の品々のリストである「調文」が、江戸上り使者の使賛から、八重山島の在番や頭たちに宛てて出されている（〔※22〕〓表A―2⁵⁾）。

表A―1

白上布	六三〇疋	牛角（大形）	二七
白中布	一〇反	牛皮（大形）	一枚
白下布	三〇反	黒木（三味線木）	六丁分
細上布（赤嶋）	三〇反	桑木	一本

白細上布	四〇反	マーニ皮	六〇〇斤
白木綿布	九三一反		

表A—2

額板	三ツ分	椰子	二〇
掛床板	六対分	貝の類	
桑茶台木	三束分	桑椀具木	二束分
桑菓子皿木	三束分	桑湯口飯鉢木	二通分
桑鞍木	二敷分	干海馬	三〇斤
		三味線木	六丁分
		木あたん	長二丈

ふたつの表が、江戸上りにおいて、Aとして八重山に注文するすべてかどうか未詳だが、興味深い点がいくつかある。まず表A—1は、献上・進上・進覧用の品そのものと、さまざまな物の仕立て用にする原材料のふたつの物をいつている。白上布から白木綿布までの布は、そのまま献上・進上・進覧用でもよいだろうが、仕立て用でもよい。牛角からマーニ（黒つぐ）は、何らかの品の原材料と

みられ、なかでも「黒木」は「三味線木」と明記されている。

表A—2は、「御進物御用」と記しているが、「額板」以下の材木は材料である。さらに、椰子・貝（「珍敷品」）・海馬（ジユゴン）・アダンといった南に位置する琉球ならではの品——さらに南方に位置する八重山産——がみえている。

また、文書【※22】は、他の八重山宛の文書が御物奉行など制度上定まった機構から出されているのに対して、江戸上りの臨時職である使贊が提出している文書であることも興味深い。ここでの例でいえば、御物奉行文書である【※45】が物品の送付を「可被申渡候」と命じているのに対し、【※22】は「乍御厄害御調達早便る御差登被下度御肝煎頼上候」とかなり下手にでている。

次に、B「御使者役々御免口（銀）詔反布・諸品等」（使者個人のもの）については、まず、道光一八年正月に、「小祿親方来子年上国二付入用」として、八重山への「重御詔」を求める文書が、使贊の本部里之子親雲上から出されている【49】⁶。その内容は、

一、式拾舛紺嶋細上布八反、長七尋五寸、幅耆尺三寸ツ、

但、御蔵模様式番・三番・五番・六番図を以等分

一、拾八舛同布式拾七反、長・幅右同

内

式拾耆反、御蔵模様三番・五番・六番図を以等分

六反、右同式番図之通

である。ひとつは、二〇升（よみ）の紺嶋細上布を八反で、一反の長さは七尋五寸、幅は一尺三寸とする。但し書きは模様の指示で、「御蔵模様」の二番・三番・五番・六番の図の模様のものを、「等分」というから八反÷四で、二反ずつ製作してほしいというもの。次の一八升紺嶋細上布は二七反で、このうち二一反は御蔵模様の三番・五番・六番の図を七反ずつ、残りの六反を二番の図で、と求めている。なお、やや量が多いので、Bではないかもしれない。

本史料の沖縄文化研究所本では、たまたま道光一八年「御手形写」と同じ一冊に、「明治廿六年度反布絵形之見本」が綴じられている。上布の模様見本帳で、石垣市立八重山博物館が所蔵する鎌倉芳太郎資料の御絵図とはかなり趣が異なり、縦綴じの文書で、半丁に六つずつの見本が記され、「十文字」「網目ビーク」「キタゴーマ」「ヒサコーシ」などと模様の名が記されている。ここで紹介したような番号はないが、こういった見本帳が、注文する方（江戸立使者一行側）と上納を命じられる方（八重山）にあつて、その番号でやりとりがなされていたのだろう。

以下、道光二〇年に予定されている江戸上りの使者一行が、個別に八重山の布などを求めた文書をまとめると、表Bのようになる。^⑦

表B

名前	布	その他	No.
小祿親方便賛・[]	拾八舛紺嶋細上布1反 長8尋・幅1尺3寸		78
浦添王子従者・佐久本筑登之	拾八舛紺嶋細上布1反 長8尋・幅1尺3寸 (御藏模様2番図)		79
浦添王子従者・具志 []	拾八舛紺嶋細上布1反 長8尋・幅1尺3寸 (御藏模様2番図)		80
浦添王子従者・高江湖筑登之親雲上	拾八舛紺嶋細上布1反 長8尋・幅 [] (御藏模様2番図)		81
浦添王子従者・小波津里之子親雲上	拾八舛紺嶋細上布1反 長8尋・幅1尺3寸 (御藏模様2番図)		82
浦添王子従者・鉢嶺筑登之親雲上	拾八舛紺嶋細上布1反 長8尋・幅1尺3寸 (御藏模様2番図)		83
浦添王子従者・喜名筑登之親雲上	拾八舛紺嶋細上布1反 長8尋・幅1尺3寸 (御藏模様2番図)		84
浦添王子 []・田 []	拾八舛紺嶋細上布1反 長8尋・幅1尺3寸 (御藏模様2番図)		85
浦添王子使賛・内間里之子親雲上	拾八舛紺嶋細上布1反 長8尋・幅1尺3寸 (御藏模様2番図)		86

浦添王子使贊・□□ (勝連カ) []	拾八舛紺嶋細上布1反 長8尋・ 幅1尺3寸 (御蔵模様2番図)		87
浦添王子使贊・湊川里之子親 雲上	拾八舛紺嶋細上布1反 長8尋・ 幅[] (御蔵模様2番図)		88
国吉 []	貳拾舛紺嶋細上布2反 長9尋・幅 1尺3寸 (模様手本の通り)	いりこ30粒	89
楽童子・安室里之子	貳拾舛紺嶋 (細) 上布2反 長9尋・ [] (模様手本の通り)	海鼠30粒	90
楽童子・宇 []	貳拾舛紺嶋細上布2反 長9尋・幅 1尺3寸5分 (模様手本の通り)	海鼠30粒	91
城間里之子	貳拾舛紺嶋細上布2反 [] 1 尺3寸 (模様手本の通り)	いりこ30粒	92
楽童子・読谷山里之子	貳拾舛紺嶋細上布2反 長4丈5 尺・幅1尺3寸 (模様手本2枚の 通り)	海鼠30粒	93
楽童子・天願里之子	貳拾舛紺嶋細上布2反 長9尋・幅 1尺3寸 (模様手本2枚の通り)	いりこ30粒	94
楽師・[]	貳拾舛紺嶋細上布2反 長8尋・ 幅1尺3寸 (御蔵模様2番・4番図)	海鼠15粒	95

楽師・牧志里之子親雲上	式拾外紺嶋細上布2反 長8尋・幅1尺3寸(御藏模様2番・4番図)	海鼠 15粒	96
楽師・浜元里之子親雲上	式拾外紺嶋細上布2反 長8尋・幅1尺3寸(御藏模様2番・4番図)	いりこ 15粒	97
楽師・亀川里之子親雲上	式拾外紺嶋細上布2反 長8尋・幅1尺3寸(御藏模様3番・5番図)	海鼠 15粒	98
楽師・富永里之子親雲上	式拾外紺嶋細上布2反 長8尋・幅1尺3寸(御藏模様2番・4番図)	いりこ 15粒	99
江戸立方書役・城田里之子親雲上	拾八外紺嶋細上布2反 長8尋・幅1尺3寸(御藏御用〈ㄨㄨ〉3番・5番図)	いりこ 30粒	100※
江戸立方書役・久場里之子親雲上	拾八外紺嶋細上布2反 長8尋・幅1尺3寸(御藏御用〈ㄨㄨ〉3番・5番図)	いりこ 30粒	101※
江戸立蔵役桑江里之子親雲上・留守口・〔 〕	拾八外紺嶋細上布2反 長8尋・幅1尺3寸(御藏模様3番・5番)	いりこ 30粒	102
園師・真喜屋親雲上	拾八外紺嶋細上布3反 長8尋・幅1尺〔 〕 (御藏模様2番図)	いりこ 30粒	103
儀飾正・伊計親雲上	式拾外紺嶋細上布1反 長8尋・幅1尺3寸5分、拾八外紺嶋細上布1反 長8尋・幅1尺3寸5分(御藏図小模様見合)	海鼠 30粒	104

掌翰使・真玉橋里之子親雲上	拾八外紺嶋細上布 3 反 長 8 尋・幅 1 尺 3 寸 (御藏模様 2 番図)	いりこ 30 粒	105
池城親雲上	拾八外紺嶋細上布 3 反 長 8 尋・ [] 3 寸 (小模様)、拾八外紺嶋細上布 2 反 長 [] (小模様)	漬天門 5 斤、海鼠 50 粒、あさ貝柱 20 本、平貝醬物 2 升	106
桃原親雲上	貳拾外紺嶋細上布 5 反 長 8 尋・幅 1 尺 3 寸 (2 反御藏模様 5 番、2 反同 6 番、1 反同 2 番図)	海鼠 50 粒、あさかい柱 20 本、平貝醬物 2 升、漬天門 5 斤	107
小祿親方使費・本部里之子親雲上	貳拾外紺嶋細上布 6 反 長 8 尋・幅 1 尺 4 寸 (御藏模様 2 番～7 番)、貳拾外紺嶋細上布 2 反 長幅同 (立横嶋に横取切にて図の通り)、拾八外紺嶋細上布 2 反 長 7 尋 5 寸 [] (御藏模様 2 番図)	いりこ 200、あさかい柱 30、平かいなし物 3 升、粕漬天門 8 斤	108
桃原親雲上※	貳拾外紺嶋細上布 8 反 長 8 尋・幅 1 尺 4 寸 (本 8 枚之通)、貳拾外紺嶋細上布 12 反・拾八外紺嶋細上布 30 反 (御藏模様 8 番 [])	いりこ 500、あさかい柱 50、平貝なし物 5 升、漬天門 冬 10 斤	109

100 ※・101 ※とも＝「来年上国二付入川御座候間、八重山島江御詠、当夏積登所望可被下候」とある。

桃原親雲上※＝「右、八重山島江調力被仰付、浦添王子江所望可被下候、以上」、さらに奥書がある (本文参照)

この表で使用した文書【78～109】の表題の多くは「調文」で、わずかに【93】のみが「注文」である。すべての文末は「(右の品を来る子年の上国に必要なので) 八重山島^江御詠所望可被下候」とし、それぞれの文書には宛先が記されていない。そして、最後の【109】において、他と同じ文末、宛先なしで文書が終わったあとに奥書があり、「此表入念織調、当夏より来夏便迄、皆同積登候様可被申渡候」として、「戌二月十一日」の日付で、「識名親雲上／小禄親方」が差出人、「八重山島／在番」を宛所としている。

つまり、これらは一連の文書であり、江戸上りの役に任じられた者が、それぞれ「八重山島へ詠えることを所望して下さい」という文言で終わる「調文」を提出し、これを受けた「識名親雲上／小禄親方」の役所がとりまとめて、「ここに記されたことを念入りに織り調べ、この夏から来年の夏の船便までに、すべて積み登るように申し渡す」と、八重山島在番に求めているのである。⁽⁸⁾

それぞれが八重山に注文した布の使用方法については記していないが、道光一八年二月に「来夏上国」する野村親方与力奥浜里之子親雲上が提出した「調文」は、「拾八舛紺嶋細上布衣反」を八重山に求めてほしいというもので、そこに「来夏上国付衣裳用」だと記されている(【53】)。

表Bの布は、二〇升(よみ)・一八升の細上布で、技術的にたいへん優れた贅沢な品を求めている。しかも、楽童子・楽師がより高級な二〇升を求めている点は、その利用法を教えてくれているのだらうか。また、布一反の長・幅が異なるのも気になる。たとえば、それまで長さ八尋、幅一尺三寸であ

ったものが、【89】から長さが九尋になり、衆童子は九尋なのだが、【93】は長さ四丈五尺とする。

もうひとつ、表Bで印象的なのは、「いりこ」「海鼠」である。通称では「海鼠」は生物名であり、本来は「生のコ」、「いりこ」は「海參」と書かれ、海鼠を加工したもので、中華料理の材料にされる。この時代に、八重山から「いりこ」はよいとして、「生のコ」の保存と輸送は難しいだろうから、「いりこ」「海鼠」はともに海參のことであろう。表記が異なっているのは、表Bは一連の文書だが、ひとつひとつは各々が記した文書であろうから、整合性はなくともよいと思われる。⁹⁾

「いりこ」「海鼠」は食用であり、八重山から調達する冠船御用の品などをまとめた「口達」(道光一八年二月)に、「去年差登置候海鼠之内、五拾斤余位悪敷、冠船方御用不相成段」といわれている(【16】)。¹⁰⁾

康熙五二年(一七一三)編纂の「琉球国由来記」には、宮古・八重山からの上納物を扱う宮古御蔵の項に「イリコ」があり、特産物として扱われる(琉球国由来記六三頁)。¹¹⁾ 日本でも、たとえば元禄期の「本朝食鑑」によれば、海鼠は「江海(うみ)の各処にいる。江東(かんとう)に最も多い。尾州の和田、参州の柵の島、相州の三浦、武州の金沢・本木などである。海西(さいこく)でもやはり多く採れ、就中、小豆島に最も多い」とある。熬海鼠(いりこ)も「江東」の海浜や越後で加工されており、小豆島のものが大きく、「薩州・筑州・豊前・豊後の産は極めて小さいが、煮れば大きくなる」とある。¹²⁾ 日本国内産のイリコは対中国貿易の重要な産品であり、幕府の統制下にあった。一方で、八

重山産のイリコを他の物とともに徳川に献上したという事実と照らせば、日本近海産とは種類が異なるなどというような、八重山産を珍重する理由があったのであろう。それは、個人が注文して持参するほど琉球を代表する土産物であったのか、また、浦添王子従者たちは求めておらず、以下の人々が求めているのにも、理由はあるのだろうかとはつきりしない。

さて、このように、地方から調達された物品の代料はどうなったのであろうか。そもそもBは「御使者役々御免口（銀） 詔反布・諸品」（※3）、「御使者役々御免銀注文口口諸品」（※142）、つまり「使者役々が御免銀で詔える（注文する）反布・諸品」といつているのだが、八重山への支払いを銀でするわけではない。

咸豊二年（一八五二）の史料に、「去戊年（註・一八五〇年）江戸立之時、惣御入目総帳」のチェックをした役人への褒美状がある（向姓家譜〈真壁家〉二四五頁）。「惣御入目総帳」は、「御進上・御進覧物并万仕立物、其外都^而之取払」についてまとめたもので、このときは、四、五年かけて調査して「現御遣高取^メ」て、「唐和琉物」を詳しくわけ、「唐和物^者代銀、両先島久米島反布^者代米取立」という¹³。小稿でみたような八重山からの布は、A・Bの区別は未詳だが、「代米」によって処理されたようだ。

道光二九年（一八四九）八重山島在番筆者への褒美状に、「江戸立御用諸反布・諸品代米之儀ハ帳残穀を以差引、自然其分二^而不足合候ハ、余之代米ハ五ヶ年府（賦）を以相渡」とあり（雍姓家譜〈目

取真家」八六七頁）、代米を上納米と相殺しようとしているらしい。¹⁴⁾

人頭税制では、布をはじめ種々の物品の上納は、米の代納という建前であり、「代付」ということがなされ、そのレートをまとめた「八重山島諸物代付帳」などの史料がある。ここでは明治期の「沖縄県旧慣租税制度参照式」所収「八重山島反布ト米トノ換算率」（琉球政府一九六八 四一〇頁）で、

表A—1・Bの布の代米をみると、次のようになる。¹⁵⁾

表A—1布の代米

白上布	一疋	〇石七五〇〇〇
白中布	一反	〇石三一五八〇
白下布	一反	〇石二五〇〇〇

細上布（赤嶋）

白細上布	一反	一石一八〇〇四
白木綿布	一反	〇石二〇〇〇〇

表B布の代米

甘柿紺縞細上布	一反	一石六九八二六
十八柿紺縞細上布	一反	一石四三三九〇

A—1の白細上布は一八升（よみ）、白木綿布は九升の例で、赤嶋細上布はわからない。布の細か

い説明は省くが、表Bのものが高価である。

計算の結果は、わかる範囲だけでも八三五石余りにのぼり、道光一七年「酉年定納布并年貢割符」(三頁)に示される八重山の正租米納分八二三石余りを超えている。八重山では、乾隆三十六年(一七七二)明和津波以来、社会的疲弊が深刻化するなかで、このような負担はきびしいものになっていた。

布を上納するには布を織らなくてはならないので、それを米に換算して他の労働と対比するのは、上納する側からは意味がないのだが、代料を支払おうという王府側は代米としている。しかし、王府はほんとうに代米を給したのかという問題は残る。

江戸上りに関して個人が王府に献納したという例は、八重山島の家譜、宮古島・久米島の刊行された家譜にもみえないようだ。ここでの興味でいえば、冠船に関しては、その経費について、公に対しての公・私からの加勢があり、賞罰もあった。公に対する公は年貢の上納であり、諸家譜に例が散見し、【※132・※140】にもみえる。冠船では「御加勢」「御借上」といわれる物品の献納が、王府に対して個人レベルで行なわれ、¹⁶⁾それには返済されたという文書があることはある。¹⁷⁾

一方、江戸上りには、八重山への注文主によって宮城氏のいうA・Bがあったように、公に対する公の加勢と、私に対する公のそれがあつたが、その内容は必要物資を献納するもので、経費にかかわる部分ではなく、賞罰もみあたらないようだ。

調達では、【※22】でみたように、Aには通常の支配システムによるものと(御物奉行発)、そうで

ないものがあり（使替発）、代料は、前者は代米による人頭税相殺であつたが、⁽¹⁸⁾ 後者は現物を代料としていて、公的資金の支出であらうが、税とは関係がない。

布におけるBの私での調達について、

一年前後の旅での春夏秋冬を通じての、しかも公私にわたる服装の準備に重い負担がのしかかったことは想像に難くない。その調達に際し、たとえ公服は支給されたとしても、私服の準備には大きく自己負担が払われたに相違ない。

と考えられるが、「私服をはじめ自己携帯品の調達として、王府は餞銭の形で助行囊餞銭を支給した」という事例があり（宮城一九八二 六五・六七頁）、使者を心配してのことだが、Bでの代料についての配慮はあつたことになる。

このときの江戸上りは、道光一八年閏四月になって、「江戸西御丸炎上」を理由に延期されることになり（②参照）、「都^而之反布・諸品調方差扣」といわれた【※142】。本格的な調達を命じられて三か月ほど、八重山側の準備がどれほど進んでいたかはわからないが、布などそのまま通常の上納に転換できるものはいくつとして、海産物などそうもいかない物品もあつただろう。

以上みてきたように、「江戸立御用物」の準備は、予定の三年前から予告され、二年前から本格的な注文が始まり、八重山からの物資は前年の夏までに徴収された。徴収対象は八重山だけではなく、馬の例や（註13）でみたように、琉球全域におよんでおり、個人的な献納ではなく、公の仕事として

献納したようである。

琉球国の国民からみれば、公・私で支える冠船と、公的な仕事として支える江戸上りという構図を想定することができそうである。そして、その両者ともに、琉球国民が国王の即位にかかわる儀礼を助けているという点が重要である。その場にいる者だけが儀礼にかかわるわけではない、たとえば儀礼論や近世琉球国の統治論などになり、そういった考えは魅力的であり、今後進めていく価値はあるかもしれない。しかし、いうまでもなく、国王らの日常衣や食料などは、八重山をはじめ各地から上納されるものであるのだから、国王の死と再生という危機的状況において、国の中心を再確認するという点は特別なことではあるものの、国民が国王を支えているのは日常的事実なことなのである。

そして近世後期、八重山に限らず王国全体の社会的疲弊が深刻化するが、そのような国内事情が、国家儀礼の継続に与えた影響も考える必要があるだろう。

【註】

(1) 江戸蔵役と江戸書役は、使者の前年、道光一九年に上国するので、彼らの注文品は今年（道光一八年）の夏に届けるよう注意している。

(2) 八重山に対しては、個人的な要求に応えるなということにもなるのだろうが、これまでのように多くの牛の飼育に念を入れ、農業を行き届かせるようにと命じている。なお、道光一六年に宮古島から冠船用の「牛

節」が運ばれている（南興氏系図家譜支流四一一頁）。

(3) 冠船の例だが、沖縄本島北部でまかなえない猪肉の不足分を、八重山に求めている（[14・21]）。

(4) ただし、「現色不相調」ときは、返上の手段を吟味して上申するよう命じている。木綿について、宮城氏は次のようにいつている（宮城一九八二 六六～六七頁）。

暖国に育った人々として上層階級のものとはともかく、跟伴などは耐寒衣服の準備が十分でなかった
ので、冬の寒さは全く苦痛の種であった：一八三二年（天保三）十一月十六日江戸入りをした使者たち
について松浦静山は：その寒さにかかわらず、琉球人はわずかに裕のみで、「聞及びし如く綿入り服はな
かったようだ」と述べている。琉球には江戸上りの衣服調製のために木綿買いに赴いた話もある。真境
名由康作「伊江島ハンドウグワ」（あるいは「辺土名ハンドウグワ」）はそれに関する物語である。
しかし綿入れ服や久米綿入れの服の準備ができたのは、限られた階層の者であった。

また、国王から將軍らへの献上物に「久米綿」があつた（横山一九八七 四二七頁など）。

(5) 表A-2とした文書【※22】をみると、それぞれのモノの注釈も興味深いが、ここでは「求摩茶」に注目
したい。この文書の形式から、使贊は八重山に「求摩茶式儀」を代価に「額板」以下の物品を注文したと
みられる。「求摩茶」は求麻茶といい、鹿児島県の琉球館が薩摩商人を介して熊本の人吉藩領の求麻茶を買っ
ており、のち勝手な売買は「国法通咎目申付」というようになり、それでも抜け荷があるほど珍重された
ようだ（真栄平二〇〇八 六五頁）。なお、咸豊六年（一八五六）王府の「異国一件」「江戸立・冠船」な

どによる財政難に、「上国之時求麻茶・繰棉重下願」での褒美状がある（明姓家譜〈亀谷家〉六九〇頁）。

(6) ②でみたように小禄親方は副使から下ろされており、文書〔49〕は効力を失っているとみられる。

(7) 表Bには、(註6)で失効しているとみられるとした文書〔49〕は加えていない。ただし、同じ小禄親方の使贊とみられる者が注文している〔78〕、〔49〕と同じ小禄親方使贊本部里之子親雲上が注文している〔108〕は、後でいうように一連の文書であり、表Bに加えておいた。これらは八重山に注文されうる物であり、あるいは実際の副使が八重山に注文するかもしれない（その意味では〔49〕も同じ）。ただし〔108〕は、注文品が他と異なる点、分量が多い点など、いちがいにBとしてよいのか躊躇はある。

(8) この一連の文書には、(註7)でみた小禄親方関係の文書も含まれていて、これらの文書も一緒に八重山に送付されたとみられる。(註6)でいった「失効」については、どのように対処されたかは未詳。なお、小稿①で触れたが、本史料での文書の数え方で、最も多くみた場合というのは、この一連の文書をそれぞれ一つの文書とカウントした場合である（つまり現状）。

(9) 乾隆三〇年（一七六五）八重山の役人から王府御物奉行所に各村の難儀を上申した文書で、「海鼠」を取り絶やしてしまい、とくに石垣四か村は人口が多く、近くの海辺の「いりこ」は取り絶やしたといっている（参造状抜書No.174）。「海鼠」「いりこ」を区別していない例である。

(10) 八重山でも「いりこ」を食べていた。同治一三年（一八七四）「富川親方八重山島諸村公事帳」（No.11）には、役人が村廻りをする際に出される「馳走」の膳符に、椀に他の食材とともに「いりこ五粒」とある。また、

イリコは薬としても利用された。

- (11) 同項には、布のほか、こゝでみた物産に、牛皮・平貝醬物・牛節・牛角・黒縄・黒木・桑木がある。黒縄はマーニの縄、黒木には「三線作用」、桑木には「鞍打用」とある。

- (12) 『本朝食鑑 4』島田勇雄訳注 平凡社東洋文庫 一九八〇年(三二一・三三三頁)

- (13) 江戸上りでは、宮古島では、道光二十一年から同二十六年にかけて「江戸立御用本付老反口」などの御用布を(白川氏系図家譜支流二三八頁)、久米島では、乾隆一七年紬三四三反・綿子一五九五把、同治三年紬三二四反・綿子七三三把を上納している(美済姓家譜三三七・三三九頁)。

- (14) なお、御殿の大親が八重山から布などを調達するための「調文」は本史料に散見するが、同治五年(一八六六)大美御殿大親への褒美状に、「毎年／御前御用并御殿御用、唐・大和・両先島・久米島御調文代料」などを弁じたところ(明姓家譜〈亀谷家〉六九一頁)。

- (15) 「八重山島反布ト米トノ換算率」にみえる白上布・白中布・白下布の換算率は、同治十三年(一八七四)「八重山島諸物代付帳」における代付と同じである。表の布以外の物品は、「八重山島諸物代付帳」では「代夫」で換算されている。

- (16) たとえば「山陽姓大宗系図家譜」「錦芳姓小宗系図家譜」所収の褒美状(石垣市総務部市史編集室一九九四二七・一〇〇頁)など。

- (17) たとえば、「山陽姓小宗系図家譜」所収の嘉慶一五年(一八一〇)三司官からの褒美状に、次のようにある

(石垣市史編集委員会一九九五 二八一頁)。

去辰年、冠(船脱力)申請付^而御入用銀大分^而之御不足^而外二出先不相見得及当迫候付、米錢其外不依何色御借入之儀申渡候処、厚波受各分限次第端布御借差上御大礼首尾能相濟、去年御返済被成下候、格別成折柄御要用相補一稜之御奉公相成殊勝之至此段申渡候也

(18) 咸豐六年(一八五六)「江戸立御用布御用物代米之儀未進之方^正引合」がいわれ(万書付集五八九く五九〇頁)、翌年「翁長親方八重山島規模帳」に王府から下される「褒美の御用布代米を百姓に配当しない役人の不正がいわれる(No.四五)。

【史料出典一覧】

御手形写拔書↓石垣市総務部市史編集室一九九八

翁長親方八重山島規模帳↓石垣市総務部市史編集室一九九四b

錦芳姓小宗系図家譜↓石垣市総務部市史編集室一九九四a

参遣状拔書(No.1く96)↓石垣市総務部市史編集室一九九五a

参遣状拔書(No.97く174)↓石垣市総務部市史編集室一九九五b

山陽姓小宗系図家譜↓石垣市史編集委員会一九九五

山陽姓大宗系図家譜↓石垣市総務部市史編集室一九九四a

向姓家譜（真壁家）↓那覇市企画部市史編集室一九八二

白川氏系図家譜支流↓平良市史編さん委員会一九八一

富川親方八重山島諸村公事帳↓石垣市総務部市史編集室一九九二

酉年定納布并年貢割符↓破名城一九九二

南興氏系図家譜支流↓平良市史編さん委員会一九八一

馬姓家譜（小禄家）↓那覇市企画部市史編集室一九八二

美済姓家譜↓沖縄久米島調査委員会一九八三

明姓家譜（亀谷家）↓那覇市企画部市史編集室一九八二

八重山島諸物代付帳↓黒島一九九九

雍姓家譜（目取真家）↓那覇市企画部市史編集室一九八二

万書付集Ⅱ沖縄県立図書館史料編集室『沖縄県史料 前近代6』沖縄県教育委員会 一九八九年

琉球国由来記↓外間・波照間一九九七

【参考文献一覽】

石垣市史編集委員会（編）

一九九五 『石垣市史 八重山史料集1 石垣家文書』石垣市発行

石垣市総務部市史編集室（編）

一九八三 『石垣市史のひろば』 第4号

一九九二 『石垣市史叢書3』 石垣市役所発行

一九九四 a 『石垣市史叢書6』 石垣市市役所発行

一九九四 b 『石垣市史叢書7』 石垣市市役所発行

一九九五 a 『石垣市史叢書8』 石垣市発行

一九九五 b 『石垣市史叢書9』 石垣市発行

一九九八 『石垣市史叢書11』 石垣市発行

石垣市立八重山博物館（編集・発行）

一九九二 『石垣市立八重山博物館紀要』 第10号

一九九九 『石垣市立八重山博物館紀要』 第16・17号合併号

沖縄久米島調査委員会（編集）

一九八三 『沖縄久米島 資料篇』 弘文堂

漢那敬子・田口恵

二〇〇八 『渡名喜島冠船日記（道光十八年）——解題および翻刻——』（財団法人沖縄県文化振興会史

料編集室編『史料編集室紀要』第33号 沖縄県教育委員会発行）

黒島為一

一九九九 「史料紹介」『八重山島諸物代付帳』↓石垣市立八重山博物館一九九九

新城敏男

一九八三 「近世期八重山における技術・学問について―家譜などを中心に―」↓石垣市総務部市史

編集室一九八三

豊見山和行（編著）

二〇〇八 『琉球国王家・尚家文書の総合的研究』（科学研究費補助金〈基盤研究B〉課題番号一六三

二〇〇九二）琉球大学教育学部

那覇市企画部市史編集室（編集・発行）

一九八二 『那覇市史 資料篇第1巻7 家譜資料3』

平良市史編さん委員会（編）

一九八一 『平良市史 第三巻 資料編1 前近代』平良市役所発行

坡名城泰雄

一九九二 「資料紹介」牧野孫宣家文書 酉年定納布并年貢割符 仕上世座」↓石垣市立八重山博物

館一九九二

外間守善・波照間永吉（編著）

一九九七 『定本琉球国由来記』 角川書店

真栄平房昭

二〇〇八 『琉球を中心とした東アジアにおける物流構造』（科学研究費補助金（基盤研究C）課題番号一七五二〇四五六） 神戸女学院大学

宮城栄昌

一九八二 『琉球使者の江戸上り』 第一書房（南島文化叢書4）

横山 學

一九八七 『琉球国使節渡来の研究』 吉川弘文館

琉球政府（編集・発行）

一九六八 『沖縄県史 第21巻資料編11 旧慣調査資料』

（得能壽美）

【参考史料】

【3】「江戸立御用物」注文の開始

来子年江戸^江御使者被差上候□御用布・御用物并御使者役々御免□（銀）詔反布・諸品等、先例を以手当仕置候様^ノ二之儀^者、去年申越置通^而二、此節別紙注文并御使者役々御免銀注文差越候間、随分入念位宜敷相調、

当夏より来夏便迄二皆同積登候様可被取計候、是迄冠船二付^而大粧之御用物相調候上、又候江戸立御用物調方別^而可及難儀候得共、御先規難差欠御用品候「」を以、屹^与引励随分注文通位宜敷相調御要用全相弁候様、精々可被致下知候、此段申越候、以上

但、江戸蔵役・書役^者来春上国仕候付、右面々注文品^者当夏便二積登候様無之候^而間二不合候間、其心得可有之候

戊二月十一日

識名親雲上

小祿親方

八重山島／在番

【22】八重山への公の「調文」Ⅱ③表A―2

調文

求摩茶式俵 内 〈□番乗船々頭西銘筑登之預り／沓俵 御調文拝慶田城にや乗船々頭伊志□筑登之預り／沓俵 但、式行運賃も爰元二^而相渡置候ハ、其「」可被下候〉

右之用物

一、額板三ツ分、長四尺、ヒ沓尺六寸以上、ア沓寸完

但、桑・浜桑之間、□木成二^而茂

一、掛床板六対分、長五尺、ヒ六寸、ア壱寸完

但、右同断

一、桑茶台木三束分

但、板ニシテ拾貳枚、長三尺、ヒ六寸、ア壱寸三分完

一、同菓子皿木三束分

但、板ニシテ拾貳枚、長三尺五寸、ヒ七寸、ア壱寸五分完

一、同鞍木貳數分

一、椰子貳拾ヲ

但、大小共取交候_而

一、貝之類

但、於大和御進物用候間、大小無構珍數品より見合候_而

一、桑椀具木貳束分

但、四ツ入椀調用候間、切数又_者大小二_而も相済申候

一、同湯口飯鉢木貳通分完

但、右同断

一、干海馬三拾斤

一、三味線木六丁分

一、木あたん長式丈

但、茶入・宝蔵・香合調用候間、切数又^者大小二^{面茂}不苦

右^者浦添王子御上国二付御進物御用候間、乍御厄害御調達早便^方御差登被下度御肝煎頼上候、以上

戌二月

使贊ノ内間里之子親雲上

勝連里之子親雲上

湊川里之子親雲上

花城親雲上様 知念里之子親雲上様

大浜親雲上様 石垣親雲上様

宮良親雲上様

【45】八重山への公の「注文」 ③表A—1

注文

一、白上布六百三拾疋

一、白中布拾反

一、白下布四拾反

一、細上布三拾反、赤嶋

但、御藏図等分調

一、白細上布四拾反

一、白木棉布九百三拾老反

一、牛角貳拾七 大形

一、牛皮拾老枚 大形

一、黒木三味線木六丁分

一、桑木老本、長三尺二六寸角

一、まあね之皮六百斤

右^者来子年江戸^江御使者被差上候付、御献上・御進上・御進覽御用并万仕立物用候間、随分入念相調、当夏
方来夏便迄之皆同積登候様可被申渡候、此段申越候、以上

戊一月十一日

識名親雲上

小禄親方

八重山島／在番

【132】冠船の際の上納未進

桃林寺^江五拾日完寺入二準科米

桃原与人

伊原間与人

桴海与人

花城与人

高那与人

崎枝与人

花城目差 / 翁長筑登之

桴海目差 / 黒島筑登之

伊原間目差 / 宮良にや

高那目差 / 石垣にや

盛山目差 / 古波蔵にや

桃原目差 / 与那覇にや

崎枝目差 / 大浜にや

右^者今般冠船付、年貢未進取円積登候様申越候付、此程相屯候未進年府并年貢取合弁達方之手筋、去々年吟味之上村柄次第穀物・諸品を以無不足上納可仕段申出、其通申付置候付、余之村々^江御時節柄之程厚汲受、兼^而手組之程現穀又ハ諸品取合上納方全引結候処、右面々噉村之儀^者九石以上四拾（石脱力）余迄段々不足相立、畢竟下知方不行届所^里件之次第候間、相当之御咎目被仰付度被申出趣相達遂披露候処、御当地之儀此程臨時莫太之御物入打統、御藏方極御口洪成立、最早前後御差繰「一」候付、此涯年貢^者勿論未進穀迄^茂精々取円積登候様、分ヶ^而被仰渡趣有之候処其汲受無之、右次第甚以不可然事^二而御咎目之程^茂不輕答候得共、此節迄^者御宥免^二而、右通被仰付候間、所遣二召成、其首尾可被申越候、以上

附、盛山与人事^者 去年以前出勤無之段申越付、不及御沙汰候

戌九月

翁長里之子親雲上

棚原親方

八重山島／在番

【140】冠船の際の貢租完納

覚

八重山島鳩間村耕作筆者／小渡筑登之

同黒島村同 ／石垣にや

同西表村同 ／黒島にや

同村同 ／喜友名にや

同小浜村同 ／新本にや

右^者冠船二付^而年貢未進全取円積登、御要用相補候様分ケ^而被仰越趣有之候処、右者共事暖役人下知厚汲受
出精致下知方百姓共作業為相働候故、余村二抽年貢・諸上納物全相調候段、在番・頭申越之趣遂披露候処、
殊勝之儀二被思召候、先様猶以出精相働候様可申渡旨御差図二^而候、以上

戌九月

喜名親雲上

浜川親方

御物奉行

右通被仰渡候間、此段可被申渡候、以上

戌九月

翁長里之子親雲上 棚原親方

八重山島／在番

〔142〕江戸上り延期

来子年江戸立之筈^二而御用之反布・諸品并御使者役々御免銀注文□□諸品等当夏^方来夏便迄皆同積登候様申越置候処、江戸西御丸炎上二付、江戸立被召延、御普請成就之上年限□被仰渡段此節御国元より申来候、右二付^{而者}都^而之反布・諸品調方差扣、年限相知申越候節調達差登候様可被申渡候、此段申越候、以上

戌閏四月

小祿親方

八重山島／在番